

ホスピタル・プレイを用いた 障害児にやさしい診療支援ツールの開発

平成 28 年度 三鷹ネットワーク大学推進機構

「民学産公」協働研究事業

静岡県立大学短期大学部

NPO 法人 ホスピタル・プレイ協会 すべての子どもの遊びと支援を考える会



目次

1. 「民学産公」協働研究事業の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・P2～P3
2. 申請団体のプロフィール・・・・・・・・・・・・・・・・・・P3
3. 参加団体のプロフィール・・・・・・・・・・・・・・・・・・P3～P4
4. 協働研究事業の期間・・・・・・・・・・・・・・・・・・P4
5. 協働研究事業の背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・P4～P5
6. 協働研究事業の詳細・・・・・・・・・・・・・・・・・・P5～P6
7. 協働研究事業の報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・P6～P14
8. 考察および今後の計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・P14～P15

1. 「民学産公」協働研究事業の概要

・目的

ホスピタル・プレイ・スペシャリスト（以下 HPS）は、医療的ケアを必要とする子どもを支援する専門職であり、静岡県立大学短期大学部では平成 19 年より養成教育に取り組んでいる。平成 28 年 6 月末までに 149 名の修了生が誕生し、病院や福祉施設などで、子どもと医療をやさしきでつなぐために活動している。NPO 法人ホスピタル・プレイ協会の理事長も務める研究代表者は、日本におけるホスピタル・プレイに関する調査及び研究を先駆的に進めており、その成果を歯科専門機関から地域歯科医院への円滑な診療移行など地域課題解決に還元するため協働活動を重視している。また高度な医療的ケアを必要としながら在宅で療養する子どもへのホスピタル・プレイによる在宅支援システムの確立にも取り組んでおり、平成 29 年 2 月現在、神奈川、静岡、愛知、大阪で 12 家族が HPS による在宅支援を受けている。

貴機構でも、ホスピタル・プレイの普及のためワークショップを平成 26 年度、27 年度にかけて計 5 回開催した結果、会場の利便性に優れているため北海道や九州からの日帰りでの参加もあった。受講者は看護師、保育士、PT や特別支援学校教員などであった。受講後の感想を分析すると、医療や教育ではない視点から、医療的ケアが必要な子どもを支援する方法が学べるプログラムはまだ日本にほとんどなく、そのために、ホスピタル・プレイの講座に対する期待が高いことが明らかとなった。ホスピタル・プレイ普及のための活動を継続すると同時に、HPS が直面するより高度な知識と援助技術が求められる課題に応えるため、国内外の先進事例を日本の実践に融合させる必要性が高まっている。課題は、発達障害（自閉症）の子どもに対する支援の確立に取り組む。日本の病児や障害児のウェルビーイングを向上させるためには、交通の利便性が高い地域で、病児や障害児にかかわる専門職が学ぶ場を創造しながら、ホスピタル・プレイのすそ野を広げる活動を進めつつ、HPS という専門職を発展させるシステムを作ると考えられる。

・方法

自閉症や注意欠陥多動性障害(ADHD)などの発達障害を持つ子どもとかかわる大人の課題はコミュニケーションである。HPS は遊びを使って子どもとコミュニケーションを形成する専門職であるが、しばしば自閉症の子どもとかかわり方が難しいとの声を聞く。しかし、自閉症という用語がもたらす印象とは裏腹に、援助する側の理解と工夫さえあれば自閉症の子どもと遊びを介在させコミュニケーションをとることは可能である。今回申請する事業を進める計画及び方法としては障害児の診療を支援するためツールを開発することである。英国プール総合病院 HPS の Carline Fawcett 氏が開発したソーシャル・ストーリーブックを参考に大阪発達総合療育センター（大阪）、静岡市障害者歯科保健センター（静岡）等の医療、療育医療施設で開発したソーシャル・ストー

リーブックを評価し、Bridget Dooley 氏の開発指導をもとに、より多くの障害を持つ子どもや医療にかかわる子どもに応用できるツールとし改良していく。

2. 申請団体のプロフィール

静岡県公立大学法人静岡県立大学は、5 学部と大学院、短期大学部、研究所の総力を結集し、「県民の誇りとなる価値ある大学」の実現に向け、教育研究活動を実践するべく、

1. たゆみなく発展する大学を目指す
2. 卓越した教育と高い学術性を備えた研究の推進
3. 学生生活の質（QOL）を重視した勉学環境の整備
4. 大学の存在価値を向上させる経営体制の確立
5. 地域社会と協働する広く県民に開かれた大学を目指す

という 5 つの基本理念を掲げている。

さらに、本学では上記の基本理念を実現するために、教育・研究・地域貢献・国際交流において、次の目標を掲げる。

1. 教育

学生を第一に考え、学生生活の質（QOL）の向上を図り、高度かつ秀逸できめ細やかな教育を提供することで、社会に貢献できる有為な人材を育成する

2. 研究

静岡県の最高学府としての自覚を持ち、独創性豊かで高い学術性を備え、国際的な評価に耐え得る研究を推進する

3. 地域貢献

県民の負託に応え、県政や産業界との連携を図りながら、卓越した教育と高い学術性を備えた研究による成果を地域に還元する

4. 国際交流

諸外国から学生・研究者を積極的に受け入れ、また世界に情報発信することにより、静岡県の国際交流の強力な推進力となる

以上の目標を達成するため、学術的・人的資源を最大限に活用した大学運営とその体制の確立を目指し、地域や社会に貢献することである。

3. 参加団体のプロフィール

NPO 法人 ホスピタル・プレイ協会 すべての子どもの遊びと支援を考える会は、静岡県立大学短期大学部が開催する社会人専門講座 HPS 養成講座修了生による職能団体「日

本「ホスピタル・プレイ・スタッフ協会」を前身団体とし、さらなる発展を目指し平成 24 年に NPO 法人格を取得した。NPO 法人 ホスピタル・プレイ協会 すべての子どもの遊びと支援を考える会と静岡県立大学短期大学部は連携しながらホスピタル・プレイ活動の啓発と普及に努めている。

NPO 法人 ホスピタル・プレイ協会 すべての子どもの遊びと支援を考える会の目的は以下のとおりである。

1. 病児や障害児に対して遊びを届ける事業（ホスピタル・プレイ）を行うことにより、病児や障害児の福祉の増進を図るとともに、ホスピタル・プレイを普及するための教育研究活動及びその専門家である HPS 有資格者のキャリアアップ活動を行うことにより、より多くの病児や障害児が医療と肯定的な関わりを持つことができるよう努め、子どもにやさしい小児医療の実現に寄与することを目的とする。
2. 病児や障害児に対する遊び支援を通して培ったノウハウを生かし、多様な問題を抱える子どもたちすべてに遊びと遊び支援が届くよう、様々な専門職と連携を取りながら、具体的な支援のための方策と方法を開発し、すべての子どもが豊かに遊び、豊かに育まれるよう子どもと家族そして社会にも働きかけることを目的とする。

4. 協働研究事業の期間

平成 28 年 7 月 20 日から平成 29 年 2 月 10 日まで

5. 協働研究事業の背景

HPS は英国で誕生した病気を持つ子どもを遊びで支援する専門職である。遊びの持つ力（癒す力、エンパワーする力、表現を促す力など）を活用し、病児や障害児が治療を受ける際に受ける可能性がある苦痛を最小限にするだけでなく、医療と一般社会の間に存在する垣根を低くする役割も果たしている。

静岡県立大学短期大学部では平成 19 年より HPS 養成教育に取り組んでいる。現在では、149 名の修了生が病院や福祉施設などで、医療と子どもをやさしきでつなぐために活動している。NPO 法人ホスピタル・プレイ協会の理事長を務める研究代表者は、日本におけるホスピタル・プレイに関する調査及び研究を先駆的に進めており、その成果を歯科専門機関から地域歯科医院への円滑な診療移行や人工呼吸時や経管栄養など高度な医療的ケアを受けながら地域で暮らす子どもへの在宅支援など、地域課題解決に還元するため協働活動を重視している。

平成 26 年度は『三鷹ネットワーク大学における HPS 養成教育プログラムの確立に

に向けた実践的調査研究』を行なった。現職の医療・福祉従事者が限られた時間で柔軟性のあるカリキュラムで、より効果的に学べるシステムを構築した。その結果、静岡県立大学短期大学部から NPO 法人ホスピタル・プレイ協会に委託する HPS 養成週末講座を開講している。

平成 27 年度は『HPS スキルアップ講座 アドバンス・ホスピタル・プレイの実施～HPS 資格の再登録制度と上級 HPS 制度の確立を目指して～』についての研究事業を実施した。成果としては①病気・障害を持つ子どもとその家族への実践的な支援方法とその根拠となる知識を学べるプログラムを提供、②Child Life Council の公式トレーニングに認定され、HPS と CLS の説明(CLS)など多職種がともに学ぶ機会を提供、③専門知識・技術を応用し、困難事例への支援やプレイ・コーディネートを行なう HPS 上級者 HPS 資格の種類、要件、資格要件を定義（平成 29 年度中の資格要件決定を目指し、静岡県立大学短期大学部、NPO 法人ホスピタル・プレイ協会で検討中）が挙げられる。

今回は「ホスピタル・プレイを用いた障害児にやさしい診療支援ツールの開発」に取り組んだ。発達障害には自閉症・アスペルガー症候群などの広汎性発達障害、注意欠陥多動性障害(ADHD)、学習障害など、それぞれの障害に特性がある。これに加え、子ども自身の個人差があり、個別性の高い支援が必要である。しかし、医療現場では、発達障害と子どもへの理解が不十分であり、診察時に拘束・抑制が行なわれ、子どもの医療に対する不安感を増大させる。また、地域の医療機関では診察を拒否されることもあり、家族は重篤な状態になるまで子どもを病院に連れて行くことができない現状がある。そこで、地域で速やかに診察・治療が可能となるよう、発達障害を持つ子どもの医療・福祉の増進と家族の精神的負担軽減を目的とし、研究事業に取り組む。

6. 協働研究事業の詳細

自閉症や注意欠陥多動性障害(ADHD)などの発達障害を持つ子どもとかかわる大人の課題はコミュニケーションである。HPS は遊びを使って子どもとコミュニケーションを形成する専門職であるが、しばしば自閉症の子どもとかかわり方が難しいとの声を聞く。しかし、自閉症という用語がもたらす印象とは裏腹に、支援者側の理解と創意工夫があれば発達障害をもつ子どもと遊びを介在させコミュニケーションをとることは可能である。そこで、Learn to Play プログラムを開発した Karen Stagnitti 氏に師事し、作業療法士からプレイセラピストとなり、現在はオーストラリア Deakin University プレイセラピー学 スーパーバイザーを勤める Bridget Dooley 氏を招へいし、発達障害の子どもたちの診療支援ツールに関する助言指導およびプレイセラピー入門に関する講座を依頼する。今回の協働研究事業によって発達障害を持つ子どもでも医療現場で放置され、拘束されることなく、セルフ・コントロール感を保ちながら

医療とかかわる経験を肯定的に捉えることができるようになることで、他者への安心感や信頼感を作り出すことが可能となる。これによって発達障害を持つ子どもでも重篤な状態になってから小児専門病院で治療を受けるのではなく、身近な地域でより速やかに診療、治療ができ、子どものウェルビーイングにつながる。また、精神的な負担感の強い家族に対しても負担感や閉塞感の軽減に貢献できる。

7. 協働研究事業の報告

(1) プレイセラピー入門講座の開催

① 講座概要

発達障害を持つ子どもと家族のつながり、子どもと社会のつながりを構築し、彼らの発達を促す支援方法の啓発を目的として、「発達障害児と遊びを使ってつながり支援する方法を学ぼう オーストラリア発 Learn to Play プログラム」をテーマに、プレイセラピストでありオーストラリア Deakin University でプレイセラピーのスタディユニットを学ぶ大学院生を指導する Bridget Dooley 氏を招へいし、プレイセラピー入門講座を開催した。

今回は平日の夕方～夜開催となったため、関東地区からの参加のみとなった。

発達障害児と遊びを使ってつながり支援する方法を学ぼう

オーストラリア発 Learn to Play プログラム

2017年 **1月18日** (水) 17:00～20:30

講師：Bridget Dooley
プレイセラピスト
オーストラリアDeakin University プレイセラピー学 スーパーバイザー/
作家療法士
プレイセラピストであるBridget Dooley氏は、オーストラリアDeakin大学でプレイセラピーのスタディユニットを学ぶ大学院生を監督するスーパーバイザーをしています。発達障害を持つ子どもと家族のつながり、子どもと社会のつながりを構築し、彼らの発達を促すためのプレイセラピー入門講座を開催します。

通訳：松平 千佳 静岡国立大学短期大学部 准教授/NPO法人ホスピタル・プレイ協会 理事長

会場：三鷹ネットワーク大学推進機構
(三鷹市下連雀3-24-3三鷹駅前同ビル3階)

参加費：3,000円

対象：HPS、CLS、保育士・看護師など小児医療・児童福祉にかかわる専門職の方、発達障害をもつ子どもへの専門的な支援方法を学びたい方、ホスピタルプレイに興味や関心があり、専門的な知識と技術を学びたい方

お問合せ・お申込先 **NPO法人ホスピタルプレイ協会**
すべての子どもの遊びと支援を考える会

TEL/FAX 054-202-2652 Mail info@hps-japan.net

平成28年度 三鷹ネットワーク大学推進機構 〔医学産科〕協働研究事業

「Learn to Play」プログラムとは

Learn to Play プログラムは、遊びを一つの技能としてとらえ、子どもたちが自分の人生を豊かに生き抜くために、遊びの力が基礎となると考えているプレイセラピーである。多くの子どもたちは遊ぶ力を自然に身に着けていくが、発達障害のある子どもたちは、遊ぶ力を身に着けることが困難な子どもたちもいる。そこで歩けない子どもがいたら歩けるように支援する、書けない子どもがいたら書けるように支援するのと同じく、遊べるように大人がパートナーシップ関係のもと支援する必要があると考えるプログラムである。遊びのなかでも特に想像遊びを重視し、発達障害のある子どもたちの想像遊びの力を促すかわりを中心としている。なぜなら、想像遊びは子どもの発達領域すべてに働きかけるゲートウェイ（入口）であると考えており、その根拠を脳科学から導いている。

想像遊びには、3つの特徴がある。1つめは、代用の力である。積み木を携帯電話に、砂をご飯に見立てる力が、想像遊びの特徴である。2つめが、ないものを有るように示す力である。「ここが玄関ね」と何もない空間にドアをつけられる想像の力が特徴である。3つめが、ものに性質、性格を持たせる力である。人形が寝ている、ぬいぐるみが怒っているなどである。

想像遊びが子どもたちから見えるかたちで現れるのが1歳半ぐらいからであると言われている。4歳ぐらいになると想像遊びを他の子どもたちと展開できるようになり、深く継続して想像遊びをおこなうことができる子どももいる。また、想像遊びの中で複数の場面を一度に展開することもできるようになる。

Learn to Play プログラムは脳科学を使って、想像遊びを重視する理由を説明している。遊びは好ましい脳内の化学反応を生み、想像遊びは脳を育てると Learn to Play プログラムは考える。思考、意思、創造力をつかさどる前頭葉と、言語の理解、記憶や物事の判断、感情を制御、聴覚をつかさどる側頭葉が、想像遊びの際に活発化し、子どもは思考と、情緒をつなげていくことが可能となる。また、想像遊びが促進するオピオイド（人間が強度なストレスを回避し自分を守るために必要な分泌）は、気持ちがいいと感じるドーパミンとつながり、「生きることが楽しい」という感覚を形成していくのである。

つらい場面でも嬉々と演じる子どもたちの様子、幸福そうな姿は、人間が自ら作り出した防衛のメカニズムであり、改めて遊びの持つ力を感じた。あわせて、遊べないことのデメリットを最小にとどめるために、治療の場面においても遊べる環境を整え、子どもの防衛メカニズムが働くようにしてあげることが大人や医療側の役割である。さらに発達障害のある子どもたちには、想像遊びを作り出せる支援が必要であることが理解できる。

以下の図は、想像遊びが子どもの発達に欠かせないことを表したものである。

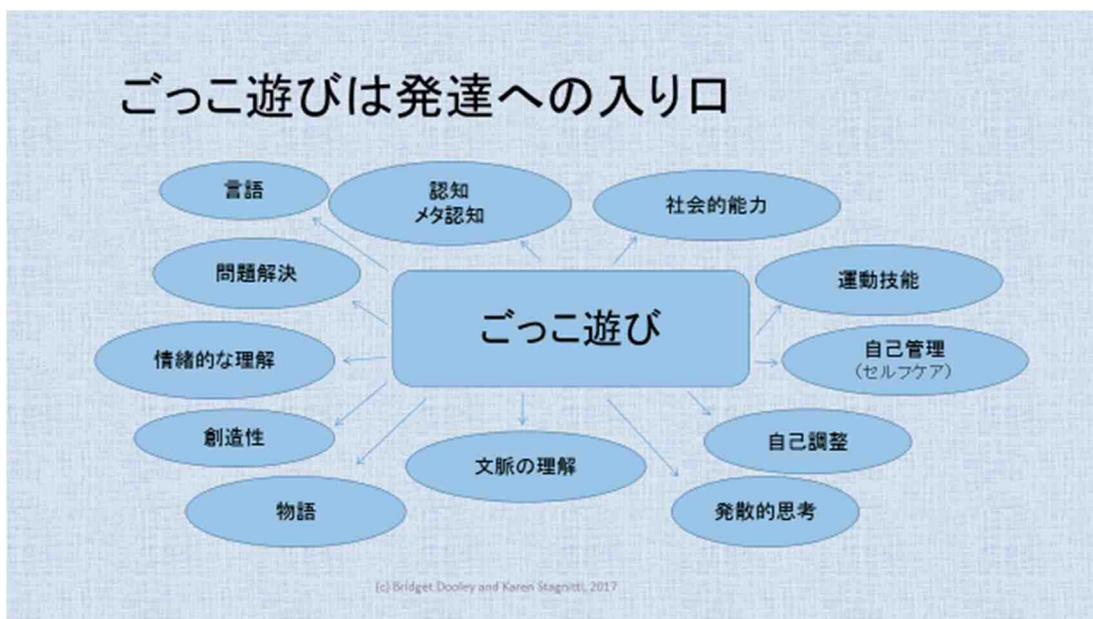


図 1

図 2 は、こどもの発達を促すために、感覚や身体に働きかける遊びと並行して想像遊びを積極的に取り入れる必要性を表した図である。

想像遊びは、一部の子どもたちには疲れる遊びである。特に発達障害を持つ子どもには、前頭葉と側頭葉をつなげる活動は、疲れる可能性があるため、例え医療の場においても隠れ場所やタイムアウトできる場所などを事前に確保しておく必要がある。

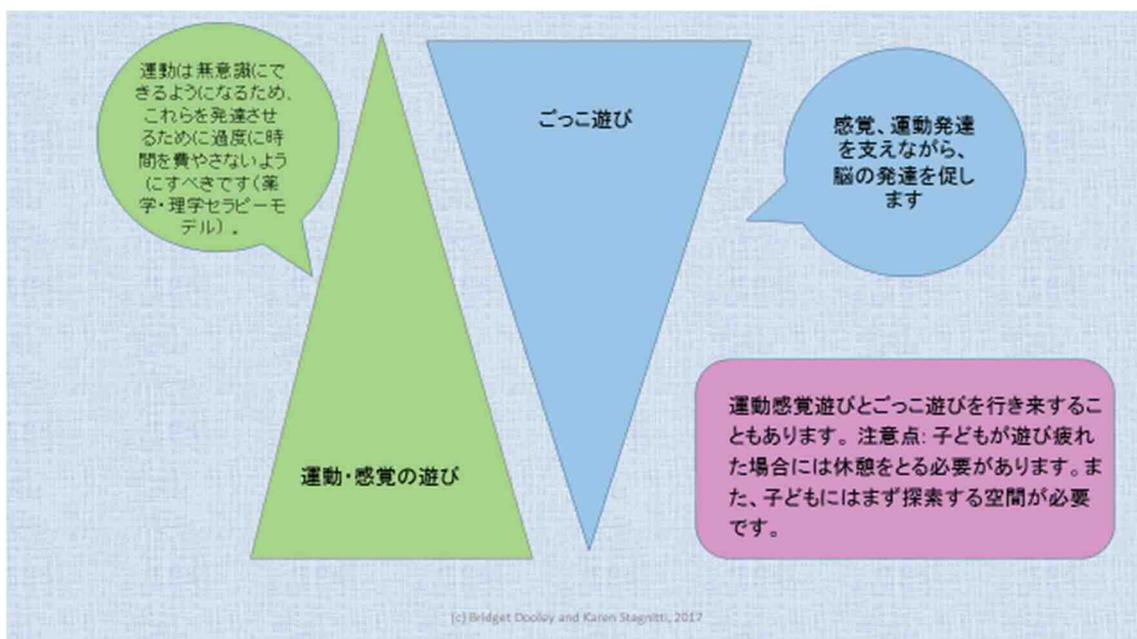


図 2

② アンケート結果

開催日時：平成 29 年 1 月 18 日（水）17 時～20 時 30 分

参加者数：11 名（HPS、看護師、療育相談室スタッフ、グリーフサポートスタッフ、障害児支援 NPO スタッフ等）

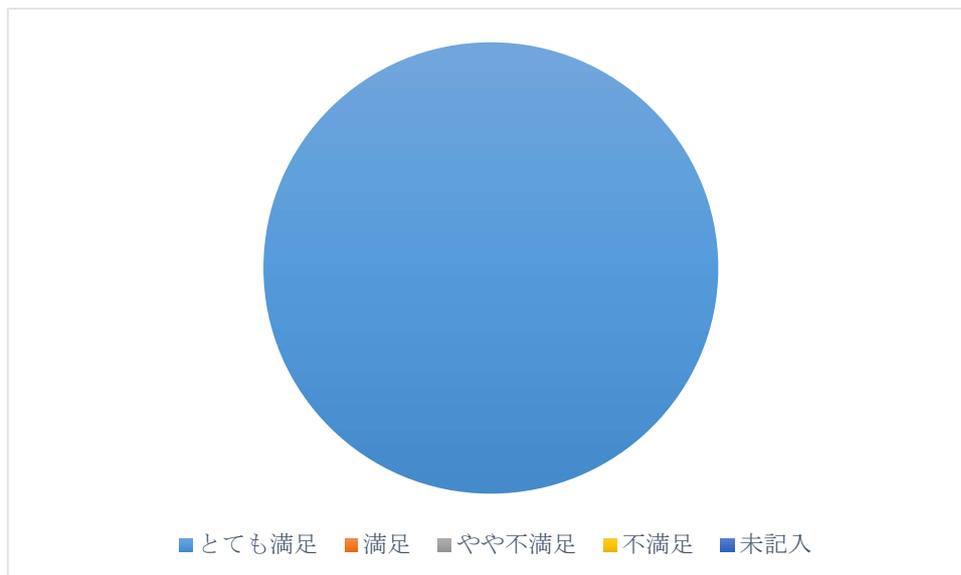


図 1 講座の満足度

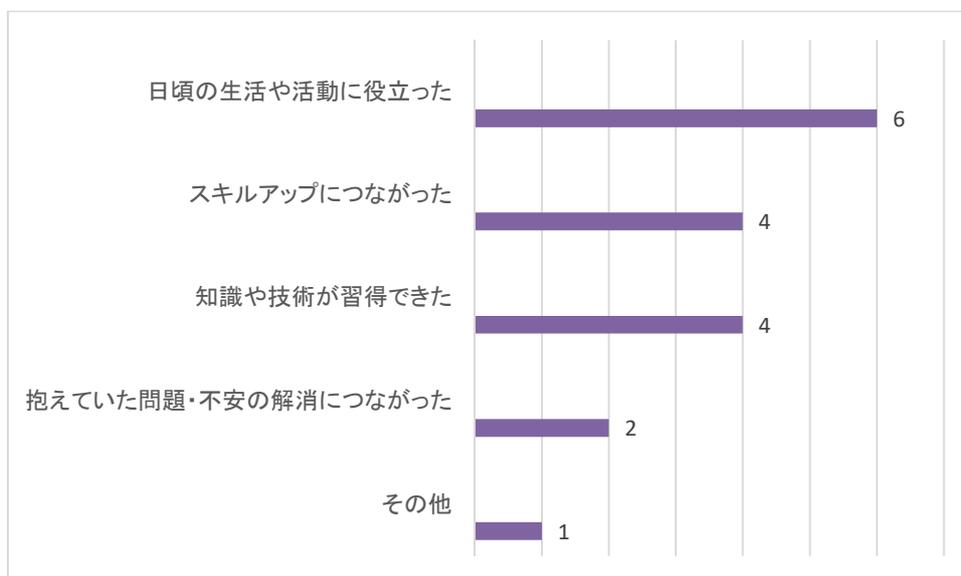


図 2 講座についてよかった点
(複数回答可)

その他良かった点

- ・自閉症についてほとんど無知なところから、どういうもので、どう遊ぶべきかを具体的に知ることができた。
- ・自閉症や発達障害の子どもの遊びにみかける特徴を知る機会になった。
- ・実技を交えながらの講義のため体験的に学ぶことができた。
- ・明日から早速自分の活動に活かそうです。
- ・実際、練習したことがよかった。

その他の意見要望

- ・ワークがたくさんあって、実感しながら学べたのがよかったです。子どもと遊ぶときにも、かかわり方を考えながら接することができるようになりたいです。ありがとうございました。
- ・とても役立ちました。特に実践の機会が多く、現場でもやってみようと思います。ありがとうございました。
- ・自分たちでやってみるのはいい機会でしたが、やっぱり机の上でさあやってみてといわれてもさっと遊べるものではなく、遊びの難しさを感じました。
- ・自閉症だけでなく、他の子どもにも役立てたい内容でした。ありがとうございました。またぜひ HPS の勉強したいです。

当日の様子



向かって左側 Bridget Dooley 氏
(オーストラリア Deakin University)

右側 松平千佳 (通訳)

静岡県立大学短期大学部 HPS 養成事業責任者

NPO 法人ホスピタル・プレイ協会 理事長)



講座中の様子

(2) 発達障害の子どもたちの診療支援ツール

ソーシャル・ストーリーブックの作成

発達障害の特徴として社会性の障害（他者との関係作りが難しい）、コミュニケーションの障害（他者に自分の意思を伝えることが難しい、相手の気持ちを理解することが難しい）、行動の障害（環境の変化に適応できない）が挙げられる。特に医療機関受診については、障害の特性や個別性があるゆえに一般的な治療であっても受け入れがたい場合がある。そこで、子どもを主人公にして写真で作成したソーシャル・ストーリーブックを用いて発達障害のある子どもにプレイ・プレパレーションと振り返りを実施した。

英国 HPS のキャロライン・フォーセットが開発した、歯科治療を受ける自閉症児のためのソーシャル・ストーリーブックを参考に、作成に取り組んだ。毎回の受診の様子を写真にとり、個々の写真ブックを歯科センター用と持ち帰り用にそれぞれ2冊作成し、毎回、写真を追加し、次回の受診の際にブックを見ながら前回まで出来たことを振り返り、認め、今日やることのプレパレーションを実施した。発達障害のある子どもの多くは物事の周辺の事象を洞察することから得られる情報を活用することが困難で、字面通りの意味で解釈するため、文字は入れずに写真を多用し、作成した。HPS との Learn to Play プログラムを活用した想像遊びを通して、子ども自身がとるべき行動、医療者がとる可能性のある行動、子ども自身に期待されている役割、医療者が自分に何をするのかを予習するためのオーダーメイドのソーシャル・ストーリーブックとなる。

5歳 自閉症スペクトラム 女児（A児）の事例

家族：両親と姉、A児の4人家族

通園施設：保育園 年中組 療育施設（週1回）

好きなもの：布団の上・音楽など

苦手なこと：初めての人・初めての場所

思い通りにならない時：床に頭を打ち付ける・自分の顔を叩くなどの自傷行為

言語の遅れ、療育手帳 B

A児は歯科検診がきっかけで、すべての病院で診療室に入れないとのことだった。最初の来院で入り口までは入るものの、すぐに外に飛び出す、待合室まで来ても、動き回り、床に頭を打ち付ける、顔を叩くなど、パニックとなり全てを受け入れられない様子であった。HPS が母親に「まず、遊びを通してAちゃんとコミュニケーションづくりをし、信頼関係をつくっていきたい」と話すと母親は「うちの子は誰とも信頼関係は築けない」と話していた。

HPS の関わり 5回目までは診療室には入らず支援室（プレイルーム）にて遊びのみ

を行った。特にラミネートした歯を縫い付けて改造したぬいぐるみに水性マジックでむし歯を描き歯ブラシで磨く「歯磨き遊び」がすっかり気に入った様子で何回でも繰り返して遊ぶようになった。6回目の関わりでは支援室の扉を開けておき、診察室が見えるようにして、診療台に注意欠陥多動性障害 A 児の好きな玩具を並べて置いた。警戒しながらも HPS の誘導に応じ、ぬいぐるみと一緒に診察室に入った。診療台の玩具で遊んだ後、ぬいぐるみを診察台に寝かせると、それまでと同様に「歯磨き遊び」を始めた。7回目よりソーシャル・ストーリーブックを用いた。母親からの情報では、A 児は駐車場から走って歯科センターまで来たとのことだった。待合室にてソーシャル・ストーリーブックを見ながら前回の振り返りを行い、A 児の出来ていることを認め、今日も同様のことをすることを話した。診察台に玩具を並べて置き、誘うとスムーズに入室できた。早速、診察台でぬいぐるみでの「歯磨き遊び」を繰り返して行った。今日は、箱の中に準備した歯磨き、ミラー、フロス（糸）と全部を使って遊んでいた。その後、A 児も診察台の上に座り、歯科衛生士からの歯磨きも出来た。終了後も待合室で遊び、機嫌よく帰院した。8回目も走って表情よく、やってきた。ソーシャル・ストーリーブックにて振り返りとプレパレーションを行い、診察室へもスムーズに入り診察台で早速ぬいぐるみへの「歯磨き遊び」を始めた。次いでぬいぐるみに歯科衛生士が歯磨きを行った。A 児は興味を示さないそぶりだったが、理解はしたようで、「次は A ちゃんの番だよ」と促すと靴を脱ぎ、仰臥位になれた。A 児の好きなオイル時計でディストラクションをし、歯磨きが出来た。

9回目の現在も機嫌よく来院し、待合室にてソーシャル・ストーリーブックを用いて振り返りとぬいぐるみでの「歯磨き遊び」を行った。その後、診療台で仰臥位になり、歯磨き・診査は A 児も理解して少しずつ出来るようになってきているが、医師の診療にはまだ至っていない。

A 児のソーシャル・ストーリーブックの一部



待合室



プレイルームで歯磨き遊び



診察室で遊んだよ



うがいできた！



診察台で歯磨き遊び



歯科衛生士からの歯磨き
(座位にて)



歯科衛生士からの歯磨き
(仰臥位にて)

ソーシャル・ストーリーブックは、子どもに、自分がとるべき行動、医療者がとる可能性のある行動、自分に期待されている役割、医療者が自分に何をするのか等を予習することで治療への準備ができ、一連の動作の流れや環境を学ぶためのツールとなった。また、医療者側には子どもの特性や個別性を伝えつつ、医療者の役割として子どもにやさしい医療を提供するためのツールにもなりえた。

子ども自身が体験した肯定的な事柄の表情の良い写真などを使ってソーシャル・ストーリーブックを作成した。同様のものを2冊作り、1冊は院内用、もう1冊は自宅用として持ち帰って何度も振り返り、家族や第三者にも出来たことを認めてもらうなどしている。

A児の母親はHPSに「この子は誰とも信頼関係が築けない」と話していたが、治療の場面でパニック状態が見られなくなるにつれ、A児が次第に母親を頼りにしている行動がよく見られるようになってきた。HPSにも笑顔を見せたり、自分からHPSと手をつなごうとしたり、自分のお菓子をHPSに分けてくれたり、身体を寄せてきたりと確実に子どもHPSの距離が縮まっているように感じる。

今回取りあげたA児と母親の親子関係は、確実に良くなっている。母親はパニックにならずに受診しているわが子のソーシャル・ストーリーブックをいとおしそうに見ている。そしてA児も安心して母親に寄り添っている。以上のことから、ソーシャル・ストーリーブックは発達障害のある子どもにとって、治療に対する恐怖心や不安の軽減、他者との愛着や信頼関係の構築、そして自己肯定感を高めることが出来るツールであると

考えられる。

8. 考察および今後の計画

今回の「民学産公」協働研究事業では、発達障害を持つ子どもに対する支援方法を確立するべく、大人が発達障害の特性と子ども自身を理解するだけでなく、子どもが医療を理解するための診療支援ツールの開発に取り組んだ。オーストラリア発の **Learn to Play** プログラムに関する講座では、脳科学を用いて、遊びは脳内の化学反応を生じ、特に脳を育てる想像遊びを重視する理由について理論と実践を紹介し、新たな知見を提示できた。

発達障害のある子どもの医療において、理解できないことがトラウマ的体験となりえる。病気や障害のある子どもに対して、安心かつ安全な医療の提供を保障することは当然のことながら、子どもを中心においた医療者のチームではなく、子どもと家族もチームの一員として治療を理解したうえで、選択し、挑戦できる機会を提供すること、そしてたとえ病気や障害があっても子どもと家族の日々の生活と将来への希望を保障することが必要である。そのためには医療の場面で子どもが感じる自身に対する否定的なイメージや喪失感を自己肯定感に変化させるためにプレイ・スペシャリストによる遊びを介在した支援が求められる。今後の課題として以下の3点を挙げる。

1. 国際的かつ先駆的な視点を取り入れた講座の継続開講

講座では脳科学の視点から遊びの重要性を説くことができた。海外における小児医療の質の改善と向上に関する取り組みを学ぶことは、参加者にとって貴重な機会であり、学ぶことで強いエビデンスとなる。同時にアクティビティやグループワークを通じて、他の参加者との交流が積極的に促され、参加者は情緒的なサポートを感じ、励ましにもなり得る。子どもによりよい支援を継続して提供するために、子どもにかかわる専門職のニーズに応えられるよう、先進事例を紹介していきたい。

2. 多様な開講形式での講座開講

今回は平日の17時からの開催であったため、関東中心に11名の参加ではあった。同様の講座が名古屋地区では35名（平成29年1月24日（火）18時30分～20時、名古屋市立大学病院）、静岡地区では122名（平成29年1月22日（日）10時～16時、静岡県立大学短期大学部）の参加となった。国際的かつ先駆的な視点を取り入れた講座へのニーズは当然のことながら、社会人が働きながら学ぶためには、参加しやすい多様な形式での開講が求められる。

静岡県立大学では社会人専門講座としてHPS養成講座を開催している。しかし、大学が開講する半年間集中の平日のみの日程では受講を断念せざるを得ない受講希望者も存在する。そこで、平成26年度の「民学産公」協働研究事業の成果を踏まえ、静岡県

立大学短期大学部から NPO 法人ホスピタル・プレイ協会に委託し、HPS 養成週末講座をパイロット事業として開講したところ、受講生のニーズが高く、さらに1年間かけて月1回、週末を中心に学ぶため、次回までに学び→実践→振り返り→評価ができ、教育効果の高い講座となった。そこで、今後も継続して委託し、開講することとなった。

両講座は文部科学省 職業実践力育成プログラム (BP) および厚生労働省 教育給付金制度の指定講座に認定された。今後も、再就職に向けた学び直しや働きながら仕事に必要な能力を向上させるために学ぶ機会を提供していく。

3. すべての子どもへの遊び支援の必要性

今回の「民学産公」協働研究事業では、発達障害を持つ子どもへの支援に特化して実施した。開発したソーシャル・ストーリーブックをはじめとし、ホスピタル・プレイによる支援は、医療とのかかわりのあるすべての子どもへの支援に有効であると考えられる。

特に新たな障害児と言っても過言ではない医療的ケアが必要な子どもへの支援にも応用できると確信している。出生率が低下する一方で、医療技術の進歩や NICU (新生児集中治療室) の整備によりたん吸引や経管栄養などの高度な医療的ケアが必要な子どもが、約1万7000人 (2015年度) いることが厚生労働省の実態調査 (中間報告) で明確となった。これは2005年度の推計から10年間で約1.8倍に増えているのである。

日本の病気や障害を持つ子どものウェルビーイングを向上させるためには、小児医療、児童福祉にかかわる専門職が学ぶ場を創造しながら、ホスピタル・プレイのすそ野を広げる活動を進めつつ、HPS という専門職を発展させるシステムを作る必要がある。